明治期の運動会
― 女学校のダンスを中心に ―

輿　水　はる海

はじめに

わが国の女学校の運動会が始められたのは1980年（明治23年）頃であるが，盛大に行なわれるようになったのは明治30年代の中頃からである。その主な理由として

①女子中等教育の重視

②女子体育の強調と，それに伴う服装改革（着袴，束髪等）

③　女性の体育指導者の養成機関の充実（東京女子体操音楽学校，日本体育会体操学校女子部，女子高等師範学校国語体操専修科）

④遊戯研究熱の高まり

以上の４点が考えられる。

女学校の運動会はマスコミの関心を集め，明治30年代から40年代にかけ，多くの新聞・雑誌が女学校の運動会について華々しく報じている。これらの記事のほか，各校の運動会誌，校友会誌，同窓会誌及び，当時の写真等を参考にして，明治期の女学校の運動会の実態を探り，特に運動会のダンスが女子体育や社会へどのような影響をもたらしたかについて考察する。

1.　運動会の位置

運動会は，日頃の体育の成果を外部へ向けて発表する場であると同時に，学校教育のすべてを世に問う一大儀式であった。また，生徒達にとっては，年に一度の楽しい一日でもあった。

2.　各女学校の運動会のダンスの特色

①日本女子大学校……デルサート式，白井式などきわめて斬新で，プログラムの大半をダンスが占めている。詩的，高雅，優美，悲劇的，勇壮なとど評されているが，美術にかなうことを目的に外国のダンスを翻案したものが多い。服装と用具の工夫は高く評価されている。指導者は白井規矩郎，平野浜子らである。

②お茶の水高等女学校（女子高等師範学校附属高等女学校）……鹿鳴館時代に踊り始められた方舞（カドリール，コチロンなど）と，バレーに基礎をおいたギルバートダンスのファウスト，ポルカセリーズ（ジムナステックダンスと呼ばれ，以後の学校のダンスの形式に大きな影響を与えた）などが踊られた。坪井玄道，井口阿くりが指導者で，全国の女学校の運動会をリードしていた。

③華族女学院（学習院女子部）……方形運動（方舞のこと）と舞（ドイツ風の体操の一部分に日本固有の舞に類似のものを用いた）で，小野泉太郎の指導による。動作は，蝶の舞いかうように活発で，美しかったと記されている。

④丸亀高等女学校……運動会の最後を飾るメイポールダンスは，明治41年から数十年間踊りつがれた。黒紋付に袴姿で踊っている。

⑤長野高等女学校……「信濃の春秋」は，郷土の四季の美しさを詠いあげた踊りで，明治35年，坪井の教え子鳥羽まつゑが作舞した。紅白二本の扇を持った全校生徒によって踊られた。以後70年余にわたって踊り続けられた。

⑥北海道庁立函館高等女学校……ダンスがプログラムの過半数を占めている。方舞（カドリール，ランサース，カレドニアン，コチロン）とフォークダンス及びファウスト，ポルカセリーズを適所に配し，全校生のプロネードで結んでいる。指導者森山てるは井口の教え子である。

⑦浦和高等女学校と女子師範学校……カドリールには，全校生徒に来賓・卒業生・職員が加わって踊っている。この形式は，他校にも多くの例が見られ，特に東京府立第三高等女学校のコチロンは有名であった。

⑧広島女学院……明治42年の写真には，生徒のダンスに外国人教師が２台のピアノによって伴奏している姿が写っている。拡声器はおろか蓄音器もなかったこの時代には，各校とも伴奏には苦労していた。主要都市では，軍楽隊に頼っていた学校が多く，オルガン，太鼓，バイオリン等による音楽隊や，合唱隊も活躍した。

3.　まとめ

今日行なわれている運動会は，会場，プログラム，運営等，その基礎は明治期に築かれたものであると云ってよい。

また，運動会は社会の関心を集め，従来の女性美の概念であった細腰繊手を健康美を求める方向へと変えて，女子体育全体を変えていく拠点となったと考えられる。

特に，運動場を野外ステージに見なして，そこに展開された女学校のダンスは，「運動会の華」としてプログラムの重要な位置を占めていた。同時に当日に至るまでの過程において，教師と生徒達の努力による教育的効果は計り知れないものがあり，これらが，学校体育の中のダンスの位置を確固たるものにして今日に及んでいると考える。

運動会のダンスの内容は，方舞及びフォークダンスとジムナステックダンスに大きく分類されるが，各々の女学校は，入退場，演技，伴奏，用具，服装等に工夫をこらし，独自の特色を打ち出しながら，伝統を積み重ねていった。

また，女学校の運動会を取りあげたマスコミの影響も見逃すことはできない。